

人生ハンド仏句

第101号

H. 22. 8. 1
(毎月1日発行)

目連さまとお盆

住職 谷川寛俊

「お盆」は毎年夏に営まれる先祖供養の大切な行事です。日本人にとって正月と並ぶ大きな行事ともいえます。

しかし、お盆という言葉は、正式には「盂蘭盆(うらぼん)」といえます。これは日本語ではありません。「盂蘭盆」はインドの言葉である「ウランバナ」を漢字に当てたものです。この盂蘭盆が略されて、一般にお盆と呼ばれるようになったのです。

「ウランバナ」とは「倒懸(とうげん)」と訳されています。

倒して懸(つる)す。つまり、逆さまに吊り下げられた苦しみという意味です。

亡き先祖が、もしその様な苦しみにあつていたら何としても救つてあげたいと思うのが人情です。その様な苦しみを救うための供養の期間がお盆の行事でもあります。

今から約二、五〇〇年前の話です。お釈迦様の弟子に目連さまという弟子がいました。この目連さまは神通第一と申しまして、先を見通す力にかけては大勢のお弟子の中でも一番でした。

ある時、自分の母親があのだろりのような暮らしをしているのだから、かと神通の力で観察したところが、餓鬼道という世界で苦しんでいたのでした。その苦しみは先にも述べた倒懸の苦しみです。

のどがかわれて水を飲もうとすると炎になり、食べ物や水を口に持つてくると火になって食べることが出来ません。母はやせ衰え、救うことが出来ません。そこでお釈迦様に尋ねました。

「良い母だったのに、どうしてあの方に苦しんでいるのでしょうか？ どうすれば救えるのでしょうか？」

お釈迦様は「あなたの母親は生前中、物惜しみが激しく、これも自分のもの、あれも自分のものと言って、人に施すことが一度もなかったという。その報いとしてその様な餓鬼道という苦しみの世界に落ちているのです。母親を助けたければ、大勢の僧侶達の修行が終わる七月十五日に、百味の飲食を施しなさい。その結果必ずや餓鬼道から救われるでしょう」と説かれました。

目連さまはその日を待ちわび、大勢の僧侶達に供養の飲食を施され、母親を救うことが出来、周りの人達が「それは良かったネ」と喜ばれた姿が、今の盆踊りとなつています。

年一度のお盆が近づいて来ました。

編集・発行
玉蓮山 真成 寺
編集 部 谷川久仁子
TEL・FAX (0765)22-2268
メールアドレス
kokorochanthk@ybb.ne.jp
ホームページアドレス
<http://www.geocities.jp/sinjoyujitoyama108/>

盂蘭盆や無縁の墓に鳴く蛙

心をこめ、ご先祖さま方に、お塔婆の供養と飲食のご供養を捧げましょう。

(子規)

